

パスカル『プロヴァンシアル』の構成*

ジャン・メナール** [著]
 山上浩嗣*** 共訳
 森川甫****

ここでの主題は、完全なかたちではなく素描のかたちです。すでに扱われたことがあるが、これまでのところ、研究者たちの関心を引きつけてはこなかったように思われる。だが、これに取り組むべき理由が少なくとも2つはある。第1の理由は、古代に起源をもつ修辞学レトリックの伝統のなかで、「配置 (disposition)」の概念がもつ重要性に関わる。それはすなわち、文章を非常に定式化された、異なった5つの部分——「序論」、「陳述」、「説得」、「反対弁論への反論」、「結論」——に配分することである。その全体は、裁判官を説得することを目的とした弁護人の法廷弁論を模範として考案された。このようなモデルは、他のジャンルの修辞的な文書や口頭表現にも容易に適用されうる。ただしその場合、「配置」の類義語である「構成 (composition)」という語が、より幅広い意味をもち、また、それほど厳密な規則に則して用いられるわけではなく、さまざまな形式にずっと一般的に適合するものであったため、より頻繁に使用された。次に、本論での考察を正当化する第2の理由がある。『パンセ』の著者がいかにしばしば「順序 (ordre)」という観念に言及しているかはよく知られている。彼はこの語を多くの意味で用いているが、そのなかで主要なもののひとつは、ある程度の長さをもった文章—さらにはひとつの著作全体—のなかで、いかにさまざまな要素を配列するかということに明確に関わっている。『パンセ』の分類を復元していくと、最初の章が「順

序」という題名を付されていたこと、そしてその章が、著者が順次たどっていくプラン¹⁾についてのさまざまな考察を提示していることが、はっきりと理解される。その他の箇所でも、いくつかの断章が明らかに構成の問題について論じている。「人の気持ちを暗くさせ、飽き飽きとさせるシャロンの配列²⁾」が痛烈に批判される。というのも、それは教科書的で機械的な性格の配列であった。そこで攻撃されているのは、自然が喚起することからあまりにも遠ざかった恣意的な順序である。「私はなぜ、私の道徳を6つではなく4つに分類して論じようとするのか³⁾。」『プロヴァンシアル』にはこれに類する記述は見られない。だが、テキストそれ自体を検討することによって、あるいは、さまざまな要素の配列においていかなる選択が働いたかを考察することによって、構成の理論と実践を具体的に理解することができないだろうか。このことで、この有名な「手紙」に用いられた方法や技巧についてよりよく明らかにする道を開くことができるであろう。

ここでは、いくつかの例について考察をほどきながら、きわめて対照的な次の2つの問題を念頭に置いて順に検討していかねばならない。それは、『プロヴァンシアル』のひとつひとつの手紙がいかに構成されているかという問題と、それら全体の内部の連続において、いかなる順序を見いだすことができるかという問題である。

*キーワード：論争，構成，レトリック。

**アカデミー・フランセーズ会員，パリ・ソルボンヌ大学名誉教授，文学（国家）博士。

***東京大学大学院総合文化研究科助手

****関西学院大学社会学部教授

1) Pascal, *Pensées*, éd. Ph. Sellier, présentation et notes par G. Ferreyrolles, Paris, Le Livre de Poche, 2000, pp. 53–57.

2) *Ibid.*, n° 644, p. 415.

3) *Ibid.*, n° 562, p. 374.



ジャン・メナール教授
 「和解のミサ」(1990年9月)*****
 ポール・ロワイヤル・ド・バリ
 聖書朗読

I

古典的修辞学や『パンセ』の著者による文章構成の規則について語ったところで、それらがそのまま『プロヴァンシアル』の場合にも適用されるとするのはあまりにも単純にすぎるだろう。「手紙」の作者は、裁判官を説得しようと努める弁護士と同じ立場にはない。たしかに、彼らはともに、叙述や論証へと訴えかけるし、説得や反駁を行なう。両者はともに、納得させようするだけでなく、相手の気に入るようにも努める。両者とも、話の導入と結論の重要性を意識している。だが、法廷での弁論の場合は、論者とその相手が対峙し、2人だけが争い合っている。第3者はいない。弁護士が代弁するゆえ、被告は黙っているわけだ。『プロヴァンシアル』においても、論者とその相手が存在する。前者はまったくの匿名に隠れてはいるが、パスカルの分身—本人よりもパスカルらしい—である。後者は、最初の10通の手紙においては、その受取人である架空の田舎の友であり、あとの8通の手紙においては、痛罵を浴びせられるイエズス会士たち（うち前の6通では彼ら全体、最後の2通では、彼らの最大の実力者であるアンナ神父に代表される）というかたちをとる。しかし、この2者からなる関係が最も重要であるというわけではない。なぜなら、第3者が存在するからだ。それは、真に著作が捧げられる相

手、すなわち読者、公衆である。実際、説得しなければならない相手は彼らをおいて他にはいないのであり、争われるこの一件においては、とりわけ彼らの気持ちをよく理解し、彼らから信頼を得なければならない。論者とその相手というはじめの2者しか関与していないように見える構成においても、実はすべてが第3の存在へと収斂しているはずである。はじめの2者の間には、ほとんど演劇的な行為が展開しており、第3者がその観客となっている。それは、教養があり、陽気で、激しやすい観客、つまりは著者そのものと同一視されうるような観客、あるいはむしろ、著者がそうありたいと望むような人間とみなされうるような観客である。このことから、作品の構成は、論証の行程によって支配されるだけでは不十分で、現実の生き生きとしたあり方とも調和を保たねばならない、ということになる。

こうして、われわれは再び『パンセ』におけるパスカルの考察と、その順序への配慮へと導かれる。形式的でも空疎なばかりに教育的でもなく、自然に根ざした順序である。しかしそれゆえに、これはまた複雑な原理であるといえる。まず、従うべき規範のもとになるべき自然は、著者に反映されていなければならない。彼は第1に人間としての資質を問われるからだ。次にその自然は、説得や告発の対象となる対話者の現実^{に即した}ものでなければならない。さらに自然は、第2の水準の対話者である公衆のあり方をもとらえておく必要がある——彼らがどのようにふるまうかを見通したいと望むのだから。手段を目的へと適合させるためには、すなわち、素材に順序を与えるためには、以上の要素すべてを勘定に入れる必要がある。順序とは、構成がそれに従ってできあがってくる規則にほかならない。ただし、自然がさまざまな形式の文章に適用されるとしても、その適用のされ方については、それぞれの形式によって一様ではない。そして、『プロヴァンシアル』はきわめて多様な形式の文章からなっている。まずは手紙の形式。すべての「プロヴァンシアル」が、最も直接的にはこれに属している。これらはすべて架空の手紙であるが、それでもそれは2つの範疇に分類される。ひとりの相手に宛てられている

*****cf. 本誌 pp. 17-18.

と見なされる手紙と、公開書簡とである。手紙という枠組みは、他のさまざまな形式の介入を容易に許容する。とくにこの連作のはじめのうちは、叙述形式が最も重要な部分をなしている。それにそこでは、対話形式も重要な位置を占めている。それは演劇での対話の様式をまねて作られている。イエズス会士たちに宛てられた手紙においても、暗黙の対話が挿入されている。そこでは、ほとんどつねに、初期の「プロヴァンシアル」に反駁するために書かれた文書への反論が行われているからだ。そして最後に、論述と、それを支える論証もまた文章を構成する要素となっている。こうしたさまざまな文章形式のひとつひとつが何らかのかたちの構成を要請するのであり、それゆえにこそ、この構成という観点からして大きな多様性が生じているのである。『プロヴァンシアル』においては、自然を尊重することで、構成に関して唯一のモデルが支配するのを退けている。

構成とは、それがいかなるかたちのものであっても、全体と部分とを関係づけることである。この関係は、並列と従属という2つのモデルに適合するものである。前者は記述的、列挙的な順序を、後者は段階的、論証的な順序をそれぞれ作り上げる。両者のいずれも自然とかけ離れたものとなりうる。前者は恣意的な分類を弄するし、後者はひとつひとつの議論の間に抽象的で堅苦しいつながりを打ち立てるからである。これら2つは、パスカルがつねに自分に禁じようと心がけていた極端な態度である。だが、自然であるためにもまた、採択された形式に対して構成のモデルを適用する必要はある。手紙は、それが本当の手紙であるという印象を与えなければ、しなやかでくつろいだ調子で構成されなければならない。手紙には従属の順序や論証形式の順序を適用しにくい。並列のモデルが適当である。それと対極にあるものとして、ある種の結論へと導いていく論述がある。その結論は、いくつもの証明や命題から導き出されるのである。この場合、従属の形式が要請される。イエズス会士たちに宛てられた公開書簡のうち少なくともいくつかは、この形式に分類されうるだろう。叙述と対話は、混合と見なしうる文章形式である。両者は生き生きとした現実の躍動に従おうと、しなやかさの表現を使命とする。

だが、叙述と対話にとって、段階的發展もまた本質的な要素である。したがって、複数部分への分割が取り入れられなければならない。われわれはこうして、まさに「繊細の精神」の領域へと侵入することになる。このことは、より一般的な考察からも確認される印象でもある。その考察とは、次のようなものだ。『プロヴァンシアル』のなかで競合しあうさまざまな形式の多様性こそが、そうしたさまざまな形式を自然の豊かさへと適合させるのに貢献しているわけだが、それは「手紙」ひとつひとつのなかの統一性を犠牲にしてはいない。そしてその統一性は、とりわけ構成によって生じたものである。順序は、絶え間ない創意工夫の対象なのである。

この小論は詳細な研究を目的としているわけではないが、いくつかの「手紙」を例に、順序を作り上げている文章を検討してみよう。

「第1の手紙」は、この点で最良の例のひとつである。その統一性は、たがいに正確に対応し合っている導入部と結論部によって、きわめて明らかである。手紙が差し出される相手に、「現在ソルボンヌで議論されていること」について報告することを目的とするこの手紙は、最初の数行からして、そうした議論がまったく空虚なものであることを宣言する。そして終わり部分で、アントワヌ・アルノー博士とその敵対者たちの論争を紹介した後、登場した諸派の間の一致点について述べる。教義の点から見て、彼らの間で意見が完全に一致していることが明らかにされる。彼らの相違は単に語句の問題にすぎない。この手紙の主題である「近接能力」という表現のもつ意味に関する問題である。こうした消極的な論述手法が神学上のきわめて難解な議論を手早く切り上げ、論証の重々しさをずっと軽減することは明らかである。それでも、取りあげられたことからは重大な性格をもって、それゆえに、あっさりとは扱われているにもかかわらず、この論争は根本的に重要な論争であることには変わりはない。

それにしても、近接能力の問題は手紙の一部でしか考察されていない。というのも、パスカルは、パリ大学神学部がアルノーに対して起こした訴訟について十分に意見を述べたかったからである。アルノーをおびやかす告発は次の2点にもと

づいている。すなわち、ジャンセニウスの『アウグスティヌス』のなかに有名な五命題が含まれているか否か（アルノーは含まれていないとした）という「事実問題」と、聖ペトロが彼の師〔イエス〕が捕らえられたときに彼が所有していた能力——師を否認しない能力——に関わる「権利問題」すなわち教義の問題である。アルノーは、聖ペトロの否認は、彼に謙虚さを教える恩寵の不足によって引き起こされた、としている。したがって、「第1の手紙」は2つの部分からなる。ひとつは事実問題に、もうひとつは権利問題に充てられている。ここでとられている順序は、並列の順序である。だがこうして区別された2つの要素はたがいに緊密に結びついている。解決困難なそれらの問題には、いずれの場合も、それぞれに固有の事柄など存在しないことが判明するからである。さらに、現実の通り、事実問題は権利問題に対して明らかに従属的なものとして書かれている。事実問題にはずっと短い論述が充てられており、単純に良識なるものを援用しつつ、直接的に論じられている。事実は目に明らかなものなので、権威の判断の対象にはなりえないというのである。反対に、権利問題は手紙の本質的な部分を占めていて、まるでそれが手紙全体の唯一の主題であり、そこでの結論が全体へと適用されているように思われる。しかも、ここで用いられている構成のあり方が、権利問題を全体からはっきりと際立たせているのである。さまざまな教義を考察したり、批判したり、いくつかを他のものと比較考量したりする必要があったパスカルは、そうした教義を本名を明かして提示することもできただけである。こうして段階的な推論を通じてある結論に達すれば、それはそれで彼が最終的に採択した結論に似たものになったかもしれないのだ。だが、そうすると、自分を学者として提示することになり、当初から身につけていた信仰に篤い一介の俗人という仮面を外すことになる危険があった。しかもそうすると、手紙の軽快な調子から乖離しすぎることにもなったはずだ。かくて、推論の段階的発展は維持されたが、その手続きは、叙述や対話、さらには演劇の形式のなかに持ち込まれることになった。語り手は単なる証人、知ることを切望する無知な人士を演じるわけである。さ

まざまな立場がそれらを代表するひとりあるいは複数の人々によって体现される。語り手はある人のもとからまた別の人のもとへと走り、またもとの人のところへと舞い戻ったりして、その人それぞれに自分で真実を発見させようとする。こうしてとうとう語り手は、教義に関するさまざまな立場の代表者を登場させる方法を見つける。彼らは実は、「近接能力」という用語を共通に用いているという点で一致してはいるが、アルノーに対してあちこちから投げつけられる論争に共同して加担する方が有利だと考え、その用語の解釈に関して互いに異なっていることを隠そうと努めているのである。とりわけ照準が当てられているのはパリのドミニコ会士たち、「新トミストたち」である。他の流派にはそれぞれひとりしか代表者が現れないのに、新トミストたちは集団で、まるで一種の聖歌隊のようなかたちで登場させられることによって、主役の座を与えられる。というのも、パスカルにとって彼らの教義は、好き勝手に操られたことばの問題を抜きにすれば、アルノーの教義と完全に合致するものであったからである。彼らがアルノーの擁護に乗り出さないのは、まったく自然に反することなのであった。

こうして、「第1の手紙」の構成は、修辞学が明らかにするさまざまな要請に対応している。とくに注目に値するのは、パスカルが順序のさまざまな様態を組み合わせる際の巧みさである。用いられる論証の奥に、ひとつの人間のありよう全体が顔を出す。神学上の流派それぞれの代表者たちが真の人格を獲得している。1人称で語る人物は、みずからに与えられた仕事に見事に適合した、生き生きとした役割を引き受ける。手紙の本来の意味での受取人がここで大雑把な特徴しか与えられていないとしても、第2水準の受取人、すなわち公衆は、楽しみかつ学びながら、内容全体に規律を与える存在となっている。しかしながら、おそらく、深刻な主題において楽しませることへの配慮は、過剰な計算にもとづく技術であるとして、相当に強く断罪されることになったであろう。また、論争の基本的な部分を省略することによって、文章が少し浅薄なものになってしまったかもしれない。パスカルはこれらの点についてもたらされるであろう意見について敏感であっ

た。一般的にいえば、彼はこの後、より単純な形式へと移行し、より深遠な内容へと到達することになるだろう。

「第4の手紙」の構成は、この点でとりわけ検討するに値するだろう。周知のように、イエズス会士の登場人物はこの手紙ではじめて現れる。だが、最も重要なことは、次の事実に関わっている。それはすなわち、いうまでもないことであるが、手紙というジャンルがここでも枠組みを提示していて、叙述や対話の形式がここでも用いられているが、教義に関する本格的な論述がここではじめて導入されるということである。その論述は、理性と権威に訴えかけ、神学本来の性質の区別を打ち立て、生き生きとはしているが堅固な段階的發展の手続きに従っている。だが、単純さと同時に新たな工夫について見るためには、「第10の手紙」に注目するのがよいだろう。

この手紙によって、われわれは道徳を扱う『プロヴァンシアル』の中心部分へと入っていくことになる。直前のいくつかの手紙と同様、「第10の手紙」は、パスカルとイエズス会士との対話のかたちで展開する。この対話者はパスカルに、良心例学の規則、つまり、キリスト教道徳の実践をより容易にする方法を提示している。それに対してパスカルは、皮肉なあるいは憤慨した反応をぶつけるのである。「第10の手紙」は唯一かつ重大な主題に集中している。それは、告解とそれがともなうあらゆる困難、罪人を意気阻喪させてしまいかねない困難である。良心例学はそれを緩和する方法を見つけだした、というのである。

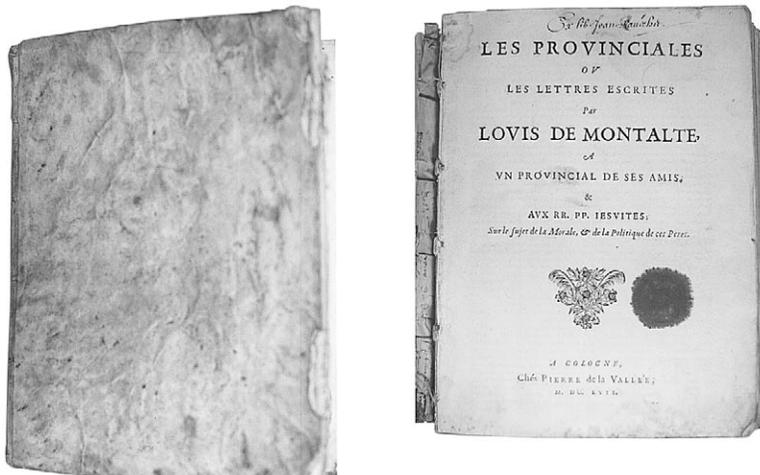
議論を導いているのはイエズス会士であり、主題を提示するのも彼である。これは、明確な意図をもった著者の戦略である。良心例学を減ぼすためには、それをありのままに紹介するのが最良の方法であるというわけだ。というのも、正しい道徳の実践には苦勞がともなうとしても、誤った道徳は、当然ながら、読者が体現する「紳士」の反発を引き起こすからだ。こうして、宗教に関するより細かな禁止事項について言明することを可能にする批判的な対話をここに挿入することもできるのである。

イエズス会士は、主題を提示するだけにとどまらない。彼は告解について扱われるべきさまざまな題材の順序をも示している。次のように手紙のプランについて語るのだ。「告解でつらいことの主なものといえば、ある種の罪について告白する恥ずかしさ、その事情を説明するわずらわしさ、罪を犯したことで果たさなければならない悔悛、2度と罪に陥らないという決心、罪を犯してしまいそうになる機会を避けること、それに、罪を犯したことへの後悔の念です。こうしたことすべてについて、もはや何らめんどろなことがないということ、今日はあなたにお教えしましょう⁴⁾。」パスカルがこうした話題を自分の意図で持ち出してきたことはともかく、彼はこんなやや教科書的な語り方を容認しえたのだろうか。おそらく容認しえたのだろう。発言の形式にはしなやかさがある。それに、プランの提示はこの通りに行われたのではなく、これはある一連の発言の途中で発せられたことばなのであり、これはその中心部分なのである。いずれにせよ、こうして示された順序は、6つの部分からなるこの手紙の全体にわたって実際にたどられている。これは、不連続で列挙的な型の順序であり、手紙や対話形式の自由さに非常によく適合している。それに、重要な問題について十全な考察をほどこすことが可能になるわけだ。

しかし、このような並列の順序が論の進展を妨げているわけではない。ただ単に列挙されているように見えるさまざまな要素が実は、あとになるほど重要な話題を提供しているものであり、こうして、話題が移行するにつれて、良心例学によって提示された「苦痛の軽減方法」がますますいまいましいものに思えてくるのである。よって、イエズス会士が語るにつれて、手紙の話者の反応もどんどん激しくなっていく。そして、キリスト教徒が神を愛することを免除されるという文書のことを持ち出されてきたとき、彼の憤慨は頂点に達する。怒りが爆発し、2人の対話者の断絶は決定的になる。

もっと詳しく検討すれば、『プロヴァンシアル』を貫通する順序の工夫のなかに、他にもさまざま

4) Pascal, *Les Provinciales*, éd. L. Cognet, mise à jour par G. Ferreyrolles, Paris, Bordas, 《Classiques Garnier》, 1992, p. 172.



パスカル『プロヴァンシアル』初版本（1657年）
関西学院大学図書館所蔵

なあり方を見つけることができるであろう。この点で、ひとつひとつの手紙がそれぞれ固有の問題を提示しているのだ。さらにいえば、複数の手紙が同時に分類される形式をつきとめるのはできそうにないと思われる。内容は毎回異なるので、それぞれの手紙は順序について異なった処置をほどこす必要があったのだ。構成の文法といったものだけが存在しており、そのうちいくつかの規則——一般的なものとパスカルに固有なもの——を、以上、示しておいた。はっきりと断言できるのは、『プロヴァシアル』の著者が、複雑さをうまく整理する技法とともに、さまざまな素材をうまく利用する技法を、2つながらに心得ていたということである。

II

ひとつひとつの手紙が、非常によく考えられた構成からなっていて、しかもそこでは技巧が自然に従属させられているのに対して、『プロヴァシアル』の手紙全体については、そのような結果が生じえたとは思われない。それらの手紙は、ある個別の時代状況から生み出されたものであり、つねに現実との関係を保持している。それらは、印刷ができあがるたびに、ひとつひとつ流布させられた。ゆえに、手紙全部があらかじめ考えられ

たプランに含まれていたわけではない。原則的に即興が作用していたはずだと考えられる。手紙全部を1巻にまとめようという決定がなされたとき、手紙の数は当初17であったのに、数週間後に、かなり前から準備されていた18通目の手紙が印刷所を出て、『プロヴァシアル』の手紙全体を取めた種々の版本の厚みを増すことになったという事実は、きわめて示唆的である。しかも、第19の手紙もすでにそのとき執筆の途上にあっと思われる。ただし、これはその後も、書き始められたばかりの手稿の状態から発展することはなかったわけだが⁵⁾。手紙の数自体にそもそも何らかの偶然が作用しているのならば、それらの連なりがひとつのプランに従ったということがいかにしてありえようか。

にもかかわらず、18通の手紙全体を集めた書物には、ひとつの特異な調和が存在している。それはいかにして生じたのか。その原因を、ある程度までパスカルにあるとみなすことはできないだろうか。

初期の手紙については、おそらくその間の連なりを予測することが最も難しかったはずだ。そもそも、最初の手紙のあとに続けられるなどということを、誰も予想しえなかった。この著作はもちろん禁書扱いであったゆえ非合法的に書かれたのであり、その発刊には困難がともなっていた。ま

5) *Ibid.*, pp. 381–384.

た、印刷業者、販売業者、本の行商人たちも官憲に追われていた。それゆえ、この企画はいつ中断を余儀なくされることも知れなかった。それなのになぜ、最初の3通がひとつのまとまりを形成しているなどということがありえたのだろうか。それはまず、これら3通がすべて、アルノーに向けられたソルボンヌでの訴訟審理に関連しているということ、それにとりわけ、新たな手紙に取りかかるたびに、パスカルは前の手紙を一段と補強しようとしていたことによる。「第1の手紙」が「近接能力」を扱っているのに対し、「第2の手紙」は「十分な恩寵」、つまり前の手紙の問題と関連する問題について述べている。しかも、前の問題もまた、神学用語とその曖昧さを背景にして論じられていた。「第3の手紙」も、敵対者たちが、アルノーの教義ではなくアルノーその人を異端とみなしているのにほかならないことを強調することで、始まった論争の空しさを示そうとしている。アルノーは裁かれ断罪されたのであり、もはや彼をうまく擁護する希望はなかった。よってパスカルはそこであきらめてもおかしくはなかった。だが、彼には続ける理由が2つあった。まず、「ソルボンヌでの議論」がパスカルに、アルノーとポール＝ロワヤルの最も執拗な敵、つまりイエズス会士たちに反撃する機会を与えてくれなかったこと。彼はこの空隙を埋めようとしたのだ。さらに、上ですでに示唆しておいたが、はじめの消極的な態度ゆえに、彼は神学的論争により深く入りこむことができないでいたのである。そしてそれを実行したのが「第4の手紙」においてである。これによって、今や十分にまとまりをもった連作の第1が——延長記号をともなって——完成されることになった。この第1のまとまりが成立するに際し、大きな偶然は関わっていないことが見て取れる。

「第4の手紙」の終わりに、新たな特徴が現れてくる。続きが予告されているのだ。パスカルは、今後イエズス会の道徳——その神学よりもさらにずっと有害である——を批判することを告知している。この予告は何を意味するのか。それはまず、初期の『プロヴァンシアル』によって勝ち取られた大成功と、それにおそらく何らかの裏工

作の成功が、出版に関与した印刷業者たちがこうむった危険を軽減し、著者がもっと長期の計画を立てることが可能になったことである。したがって、手紙がその後も1通ずつ発刊され続け、そのそれぞれが固有の構成をもっているとしても、それらはもっと一般的な、複数の手紙に適用されるプランにもとづいて構想されていたということになる。こうして「第5の手紙」は、「第10の手紙」まで継続するひとつの方針を採択する。それは、著者とイエズス会の神父との対話という形式で書かれたのである。この形式を維持することは、同じ主題について書くのと同じように、それだけでひとつのまとまりを形成する条件として十分であった。さらにいえば、一貫した進展の動きが複数の手紙にまたがって貫通し、それに従って論旨が発展することとなった。このひとまとまりの論述からすれば、「第5の手紙」は、イエズス会士の道徳の原則について述べる大きな序文を提示していることになる。それはまた、次の手紙の予告をもって終了する。「第6の手紙」も同じ主題を扱うが、今度は良心例の解決の実践に重点が置かれている。この手紙はその中央部分で、配列の方針を次のようなことばで表明している。この方針は、その手紙の末尾部分と、それに続くいくつかの手紙の構成を——かなりゆるやかにではあるが——支配することになるだろう。

「わたしたちは、あらゆる種類の人々のための規律を用意しています。聖職録所有者であれ、司祭であれ、修道士であれ、貴族であれ、召使いであれ、金持ちであれ、商売人であれ、事業がうまくいかない人であれ、貧乏で困っている人であれ、信心深い女性たちであれ、そうでない女性たちであれ、結婚した人々であれ、放蕩な人々であれ、どなたのお役にも立つように。つまり、わたしたちの良心例学者たちは、その先見の明によって何ひとつ見落とさなかったのです。」——「ということは」と私はいった。「聖職者、貴族、平民のそれぞれに向いた規律があるということですね。[...]」⁶⁾

これは、さまざまな良心例を提示するのに、非常

6) *Ibid.*, p. 104.

に具体的で非常にゆるやかな枠組みである。その良心例のいくつかはまた、さまざまな一般的な問題を導き出し、適宜提示されてはそのつど検討されることになる。たとえば、「第6の手紙」の続きでは、聖職禄所有者、司祭、修道士たちの良心例が扱われる。その後、従者の例が大げさに取り上げられるが、これは、イエズス会の従者であるジャン・ダルバの印象的な物語をもちだすことによって、イエズス会士たちをからかう機会となる。かくてこの手紙はみごとに完結して書き終わられるのだ。ジャン・ダルバは、自分の俸禄が少ないと思い、それを増やすために窃盗をはたらいでも、まったく良心にさからうことはないと考えたのであった。

「第7の手紙」の主題もまた、前の手紙に列挙されたことがらから派生したものである。だが、ここで扱われている例は独特である。それは貴族の例であり、彼らに関して、決闘と殺人という大きな問題が論じられる。

「第8の手紙」で、列挙の際に示された順序が復活するが、少々それは修正されている。こうしてここでは裁判官の例が検討される。次に扱われるのは商人の例である。金貸しの問題について考察する道が開かれるのだ。次に、破産者も含めて、商売がうまくいっていない者たちの例が続く。貧乏であろうと金持ちであろうと、なんらかの必要に迫られて盗みをはたらくにいたった者たちの例が、当然関係してくる返済の問題とともに提示される。

「第9の手紙」は、「第6の手紙」にあった予告のなかで、信心深い女性たちについて触れられた箇所に関わる。というのも、この手紙の議論は、ル・モワヌ神父がよく口にする「たやすい信心」がもつさまざまな形式をめぐる展開しているのである。

「第10の手紙」についてはすでに述べたが、上記の予告のなかに、この手紙の主題である告解の実践に対応する項目は見あたらない。この主題は、信心深い女性についての話題に続いて、「第9の手紙」の末尾で扱われた主題のうちのひとつなのだ。だが、この主題は、より緊急に考察する必要があるとみなされたイエズス会士の政治の主題と関連づけられる。とはいえ、イエズス会士の

政治の主題は、「第10の手紙」の冒頭では扱われていない。このことにはまた、告解に関する規律に、そうした問題がとくにはっきりと現れているからという理由づけがなされている。イエズス会士の政治の問題は、「第5の手紙」でもすでに扱われていたから、という理由もまた付け加えることができよう。

したがって、初めの4つの手紙が、それぞれ独立して構想され、それらの間の統一性は、それらのひとつひとつを、すでに開始していた一連のまとまりのなかに位置づけるという態度から帰結したものであったのに対し、続く6通の手紙（「第5」～「第10」の手紙）は、当初からひとつのまとまりを形成していた。このまとまりはただひとつの道筋によって構成された。ただしその最後に位置する「第10の手紙」には多少の揺らぎがうかがえる。それでもなお、「第10の手紙」は、それが末尾となるひとまとまりの完全な結論として現れている。というのもそこでは、神への愛という大きな問題と、そのさらに奥では、イエズス会士とジャンセニストの相違が扱われているからである。したがって、イエズス会士との断絶が生じる劇的な終局にいたり着くこの手紙の結論部は——そこではきわめて慎重に論の構成が考え抜かれていることはすでに見た——、同時にその手紙が末尾を飾る6通の手紙のまとまり全体の結論をもなしているのである。

こうして、対話と皮肉の使用によって特徴づけられる『プロヴァンシアル』第1部のまとまりは、ここで終了する。先に述べたように、手紙は続いて、イエズス会士たちへの公開書簡となり、その後アンナ神父だけに宛てられるようになる。いずれにせよ、はじめの手紙に登場していた虚構の人物たちは姿を消している。闘いは直接、白日のもとで展開する。著者はみずからの感情をもはや抑制せず、手加減なく怒りに身をゆだねるようになる。暗黙のうちに彼の援護を期待された読者は、そこで審判を務めるのだ。

こうしてできた第2部のはじめの6通（「第11」～「第16」の手紙）は、その全体がイエズス会士へと宛てられているが、これらはその前の6通と共通の特徴を示している。それは、この2つのまとまりの分量が同じであることから確認されるこ

ともである。このことは、構成において調和を保とうという意図を明らかに示しているだろう。この新たなまとまりは、またもイエズス会士の道徳の考察を行っている。だが、それはもはや提示のかたちを取らず、反駁のかたちを取っている（ここで再び修辞学の大きな特徴が見いだされる）。弛緩した道徳を主張する連中が、『プロヴァンシアル』の著者に対して与えた回答——その際に彼らはこの著者の取った方法をまねているわけだが——に対して再び反論するのである。この新たなまとまりもまた、初めから統一的なものとして構想され、一貫した展望のもとに構成された。その最初の手紙（「第11の手紙」）は、「第5の手紙」と同様、原則的な問題を新たな方針のもとに提示する。それはすなわち、論争の実際の状況から派生してきた倫理の問題——これは美学の問題と不可分である——である。それに続くいくつかの手紙は、より広範でかつより集中したかたちで、前のまとまりにおいてはばらばらの順序で扱われていた道徳の主題——施し（「第12の手紙」）、殺人（「第13」～「第14」の手紙）、中傷（「第15」～「第16」の手紙）——へと立ち戻っている。この最後の中傷という主題は最も新しいものである。これを考察することによって、パスカルはとりわけ、イエズス会士たちによってポール＝ロワヤルに投げつけられた虚偽の告発に対して反駁することに専心している。こうして、手紙は次第に論争の現況へと移行していく。この移行の必然性は、文面からだんだん見て取れるようになっていた。

したがって、「第17の手紙」によってはじまり、「第18の手紙」へと続いていくのは、現況と もっと直接に結びついたまた新たなまとまりである。国王の聴罪司祭という任務によって数々の政治的決断をもゆだねられていたアナ神父に手紙が宛てられているという事実が、ここで生じた変化をはっきりと示している。それとともに、パスカルは道徳の主題を論じるのはやめて、本来の意味での神学と、論争の直接の主題であるジャンセニウスの教義についてあらためて考察をはじめ。彼の主な目的は、その友人たちと同様、口論や断罪の数々に終止符を打つべくおたがいの調整を模索することであった。よって彼は、もっと妥協的

な調子で書く必要があった。

したがって、この最後のひとまとまりは第一のまとまり〔「第1」～「第4」の手紙〕と呼応している。この最後のまとまりをそのまま継続する必要があるのか、あるいはそれを中断するほうがもしかすると有利なのではないかというためらいが生じていたことはすでに見た。手紙のさまざまなまとまりの間の配置から見て取れるバランスへの配慮からすれば、パスカルの野心は第20の手紙にまで及びえたと考えることも許されるだろう。そうすれば、4・6・6・4という、構成上の完璧な律動を得られたであろうからだ。しかも、それを2つのまとまりに分ければ10・10となる。状況からそのようにはならなかった。だが、こうした最終の状態にたどり着かなくとも、われわれは、パスカルがその手紙全体の配置について注意を払っていたこと、彼がそこですぐれた技巧を明らかに示したことを十分に納得できるのである。

以上の考察から、1通ずつ別々に見た場合も、その全体を見た場合も、『プロヴァンシアル』を偶然から生じた文書であるとみなすには慎重にならざるをえないことが理解される。たしかに、本著の誕生はある特定の事態が原因となった。だが、1通1通を急いで書かなくてはならなかったにもかかわらず、著者は決して、内容をしっかり統御し秩序を与えることを怠りはしなかった。しかもそれに、執筆に時間をかけてはじめて發揮できるようにすぐれた技巧を加えたのである。修辞学という世俗の実践が完璧に操られ、パスカルが深く感じ取っていた近代の時代的要請に適用される。そしてこのことが修辞学という技法の規則を融通無碍なものとし、その上でそれが生き生きとした自然に適合させられる。そればかりではない。時の状況をみずからの仕方では把握することによって、そして、まさにそれを表現する際に用いる順序によって、パスカルはそうした状況の拘束から離脱し、それを一段上から見通すことで、時代的なもののなかに宿る普遍的なものの姿を明らかにするのだ。しかも、『プロヴァンシアル』全体の成り立ちは、ひとつひとつの手紙の構成と同じく見事に統率されており、このことが、時代の状況にとらわれないでおこうという意図、少なく

ともそれとは距離をとっておきたいという意図を証拠づけている。それゆえにパスカルは、ポール＝ロワヤルとその敵対者との論争を主題に書いていても、煩瑣な神学的議論をもちだすことはなかった。そんなことをすれば、本質的なもの、現実的なものの上に身を置こうとしているはずが、泥沼に足を取られて抜け出せなくなってしまうかもしれないのである。このことがまさに、最初の3通の手紙から「第4の手紙」への移行を、そしてもっと明白なかたちでは、道徳についての考察への移行を説明する理由となっている。道徳の考察は最終的に、『プロヴァンシアル』で最も多くの部分を占めることになったのである。しかも、手紙のひとつひとつの間には、それらを連結する構造が存在し、さまざまな分節や分類を生じさせていくのだが、この構造もまた注意深く秩序づけられている。これにより手紙全体が、部分と全体の間みごとな配置の妙をたたえた、調和のとれた建築物のような姿を現すこととなった。絶えず精神の動きに相即しながら、生き生きとした現実のなかにしっかりと腰を下ろすこと——このことがまさに、パスカルが望む、自然のあり方に適合した作品に固有の事態なのである。*****

*****本訳稿は山上浩嗣が作成し、次いで、本誌、他の翻訳と表記の整合のため、森川 甫が加筆、修正した。